

●特別賞〔論文概要紹介〕

ガーナに賭けた青春

愛知県名古屋市立当知中学校 いとうゆうじ 伊藤雄司

【実践の概要】

これは、3年間ガーナと一緒に歩んできた160名の生徒の成長記録である。コンセプトは、「一方的で上から目線的な支援」ではなく、相手の気持ちを考えた「対等な立場での支援交流」である。ガーナの現状や人々の気持ちを知り、どのように支援するかを生徒が話し合って決め、実際に行動する。この一連の活動によって自尊感情を高め目指す生徒像に迫った。

【論文内容の紹介】

1 実践のねらい

国際的な協調が求められる社会に生きる生徒には、将来、他者を思いやり、協力して問題を解決できるようになってほしいと私は考える。また、社会に対して受け身になるのではなく、自ら進んで他者と関わってほしいと願っている。そこで、他者のために進んで行動していくことのできる生徒を育成するためにこの実践を行った。

2 実践の手だて

自尊感情が高いと人間関係を良好に構築できる可能性が高まり、その自尊感情は、重要な他者からの承認の大きさに相関すると言われている。そこで私は、生徒の自尊感情を高めるために三つの活動を設定した。

(1) 他国の状況や他者の気持ちを〔知る〕活動

この活動では、写真や手紙、ビデオレター等を通して、ガーナの現状、ガーナの子どもたちやガーナの支援を行っている青年海外協力隊員の思いを生徒が知る。

(2) 支援の仕方を〔考える〕活動

この活動では、ガーナの現状、ガーナの子どもたちや青年海外協力隊員の思いを知った上で、どのような支援活動をしたらよいかを考え、グループや学級全体で話し合って決める。

(3) 他者のために〔行動する〕活動

この活動では、生徒自身が決めた支援活動を、学級単位で協力し合いながら実際に行う。

【1年生】

- ①エコキャップ回収運動
- ②街頭募金活動

【2年生】

- ①ドリームノートプロジェクト
- ②ビーズバザープロジェクト

【3年生】

- ①巾着袋プロジェクト
- ②文房具プロジェクト
- ③おりがみアートプロジェクト
- ④We are the worldプロジェクト
- ⑤フェアトレードプロジェクト

3 実践の成果と課題

これまで他者に対して関心が低く、「自分は自分」「他人は他人」という考えをもっていた生徒が、人のために行動したいと答えている。

普段の生徒の姿にも変容がみられてきた。以前はクラスの欠席者の机の上に置きっぱなしであったプリントが、机の中に入る様子が見られるようになってきた。中には、プリントのサイズを揃えて封筒に入れたりする生徒も現れてきた。日直や係がすべき仕事に滞っていた場合でも、自ら気付いてやってくれる生徒が増え、他人任せにしたり、自分には関係ないと無関心な行動をしたりすることが減った。

ガーナを支援するための「知る・考える・行

動する」という一連の活動が、自尊感情を高めることができたと考える。

また、ガーナの人々や青年海外協力隊員さんとの交流により、他者から褒められたり、喜んでもらったりする経験から自己が認められ、もっと人のために頑張りたいという気持ちの原動力になっていることが分かった。

今後は生徒が自分たちの力でより責任をもって乗り越えていける課題設定をする必要がある。

●奨励賞【論文概要紹介】

ICT普及と質の向上を目指して ～大切なのは「機器」ではなく 「授業」～

長野県箕輪町立箕輪中学校 あべともゆき 阿部知之

【実践の概要】

「ICT機器月間活用時数250時間突破！」

本校ではタブレット端末が導入された昨年度、ICT機器を使った授業が1000時間を超え、タブレット端末を使った授業だけでも約500時間となり、機器の継続的な利用に留まらず、質の高い機器活用が実現されていると感じる。これは、新しい機器が導入されたことを契機に、ICTを活用した授業づくりに全校体制で取り組み、日々少しずつ研修と実践を繰り返すことで、授業力向上に向けた活動にICTが結び付いたためによると考えられる。

本論文では、本校のICT機器活用の普及と質の向上を目指した取り組みについて紹介する。

【論文内容の紹介】

1 ICT普及の手立て

- (1) ICT機器環境整備
- (2) 活用方法の共有
 - ① ミニ研修会「ICTちょっとやろう会」
 - ② ICT通信（毎週発行）
 - ③ 実践のまとめ
- (3) 活用方法の焦点化「iPad活用の三本柱」
 - ① 情報の見える化…大きく見せる
 - ② 協働型・双方向型授業の充実…伝え合う
 - ③ 個別学習の充実…基礎・基本の定着

2 質の向上を目指して

- (1) 授業づくりに対する教師の意識変化
 - ① 撮影時や見るときの視点を与える
 - ② 発表や学び合いの土台づくり
 - ③ 記録として生徒に残す板書の充実
- (2) 「ここぞ！」を考えた効果的な機器活用
 - ① タブレット端末で自分を客観視し、友と学び合うことで技能・表現が劇的に向上した技術の授業

【まとめ】

ICT機器の種類や数量等に関係なく、教師が授業で使いやすい環境と活用方法が明確であれば、ICT機器活用は飛躍的に進むことが分かった。

また、教師のICT機器活用が進むことで、「タブレット端末を用いても話し合いが進まなかった」や「予想以上に生徒の活動に時間がかかった」など、様々な課題が出てきた。そこで、「生徒が活動の見通しをもてるように課題を明確にすること」や「タブレット端末の画面上のものは残らないので、記録として生徒に残すための板書に力を入れること」など、ICT機器活用を通して授業自体の改善に意識が向いてきた。

最終的に、ICT機器導入をきっかけとして教師は自身の授業内容を振り返る機会が増え、授業が変わってきた。そして、授業が変わることで機器活用での「ここぞ！」が明確化され、

ICT機器の活用がさらに進み、その質も向上することが分かった。

まとめとして、「情報を大きく見せる」ためには実物投影機を使っても、タブレット端末を使ってもできることである。結局は、どの場面で何をどのように見せたいか、ということが大切である。つまり、どんなに最新の機器が入ったとしても、土台となる授業を設計していくのは教師であり、最終的には教師の授業力にかかってくる。

ICT機器は使い方によっては子どもたちの力をさらに伸ばすことができるものである。ICT教育の普及と向上を図るためには、「機器」ではなく「授業づくりに対する教師の意識改革」であることを提言し、本論文のまとめとする。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

アクティブ・ラーニング による授業改善

～「教え」から「学び」へ～

高知県本山町立嶺北中学校 おおたにとしひこ 大谷俊彦

【実践の概要】

本論文の前半では、平成26年11月20日の文部科学大臣の諮問文により現在注目を集めている「資質・能力」や「アクティブ・ラーニング」に着目し、「21世紀を生き抜くために必要な力とは何か」を考え、「今、なぜ、アクティブ・ラーニングなのか」ということについて考えていく。

後半では、「21世紀型能力」や「探究型の授業」をもとに、本校の研究主題と絡めながら、生徒の確かな学力と表現力の育成に向けた取組を紹介していく。なかでも、「年間20回を超える研究

授業」や新たな授業モデルである「嶺北スタンダード」、生徒からの通知票「授業力調査」を活用しての教師の意識改革、総合的な学習の時間の年間計画としての「イメージ図の作成」などの実践は、どこの学校でも応用できるような一般化への手がかりが含まれているものと考えている。

【論文内容の紹介】

1 「確かな学力と表現力」の育成に向けて

【方策1】年間20回を超える研究授業の実施

「授業力」を高めるポイントは、①自ら授業を実践し、多くの人に見てもらい、②他の優れた授業を参観する、③授業について語り合う、という「実践・参観・交流（やる・見る・語る）」が最も大切である。

【方策2】嶺北スタンダードの作成

授業の展開部分に、「思考する場面」と「表現する場面」、生徒が「できる・分かる（習得）」「使える（活用）」「役に立つ（探究）」ことを「実感する場面」を必ず指導案に盛り込むことで、学びと実生活のつながりを意識させることができると考えている。

【方策3】「授業力調査」の実施

今まで「授業を変えよう！」と何度呼びかけてきても、即効性は見られなかったが、今回の生徒からの通知票「授業力調査」が、教師の意識を大きく変える「起爆剤」となった。

【方策4】総合イメージ図の作成

総合的な学習の時間では、①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現、といった「探究の過程」が繰り返されていく一連の学習活動となるよう、「総合（探究的な学習）イメージ図」を作成した。この作業を通して、各教員が活動と活動の「つながり」を意識することができ、一年間の学習の見通しをもつことが可能となった。

2 研究を終えて

経営の神様と言われる松下幸之助さんは「人と比較をして劣っているといっても恥ずること

ではない。けれども、去年の自分と今年の自分を比較して、もしも今年が劣っているとしたら、それこそ恥ずべきことである」「石の上にも三年という。しかし、三年を一年で習得する努力を怠ってはならない」という言葉を残している。

教師の「授業力」についても同じことが言えるのではないか。前年よりも今年、今年よりも来年と「授業力」を向上させる努力を怠ってはならない。教師ならだれもが、「子どもがいいきと輝き、子どもの成長が実感できる授業をしたい」と願っているはずである。

今までの「アクティブ・ティーチング（教え）」を少し控え、「アクティブ・シンキング（学び）」を大切にする授業へと、教師の意識を変えることが大切なのである。

「授業が変われば生徒が変わる。生徒が変われば学校が変わる。」と言われるが、「教師の意識が変われば授業が変わる。授業が変われば、子どもの未来が変わる。」と信じて、今後も、一步一步邁進していきたい。

●奨励賞【論文概要紹介】

自ら学び続ける自律した 英語学習者の育成

佐賀大学文化教育学部附属中学校

よこやま ちはる
横山千晴

【実践の概要】

本校英語科では、3年間の表現活動の最終ゴールをミニディベートとし、各学年のパフォーマンス課題を設定している。また、その評価の方法としてループリック評価を用いてい

る。ループリックによる評価は、一般的に形成的評価として用いられるが、本校では、生徒と共にループリックを作成、改善を行い、最終的な評価にも用いている。本論文では、最終表現活動であるミニディベートの実践を振り返り、今後どのように3年間のパフォーマンス課題やループリックを改善すべきなのかを検証した。

【論文内容の紹介】

1 本校英語科の目指す生徒像

学んだ知識や技能を活用し、自分の思いや考えなどを相手と伝え合う総合的な力である「発信力」を高め続ける生徒の育成を目指している。

2 授業実践のポイント

①「学習意欲」を高める手立て

単元計画を配付し、その単元の問いとパフォーマンス課題を示すことで、生徒は見通しを持って学習に取り組むことができる。特にモデルパフォーマンスを示すことで、具体的なイメージを持つことができ、自分で考えて学習を進めることができる。

②「学びの継続性」を重視した指導

パフォーマンス課題に合わせて、様々な帯活動を組み合わせて行っている。

③「さらなる高みを目指す」ための手立て

モデルを生徒に示した後、パフォーマンスに必要な要素をあげさせ、KJ法を用いてループリックの評価項目や基準を決定している。ループリックは中間発表会で使用し、必要であれば改善し、本発表で使用している。

3 今後の改善ポイント

学年に行ったアンケート結果から、設定したパフォーマンス課題が生徒にとって興味をもつことができるものであったこと、帯活動がパフォーマンス課題などの表現活動に結び付く活動になっていたことが分かった。また、パフォーマンス発表前に、発音練習、発表練習などを十

分に行うことで、発表のイメージをもったり、準備不足な部分や改善すべきポイントを確認したり、より良い発表にしたりするために意欲を高めることができたようだ。そして、ループリックに対しては、「目指すゴールがわかりやすい」「評価基準を知ることによって自分のレベルを知り、目標を設定することができた」「自分たちで決めたことで、自分たちの力に見合ったものになったから」「ポイントを知ることができたから」などの意見が出された。

今後の課題として、表現活動に役立つと評価が高かった帯活動のUseful Expressionsに系統性をもたせ、どんな表現をどれだけインプットするのかということを決めていく必要があると感じた。また、ループリックの評価の観点やその内容が同じような文言になってしまうことがある。パフォーマンスの質を上げるためにも、内容部分の改善に取り組んでいきたい。そして、自分が得た情報や考えを積極的に英語で発信し、相手とのコミュニケーションをとることができる生徒を育てていきたい。